

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531110

研究課題名(和文) 推論発問を中心とした生徒の深い英文読解と豊かな表現を促す発問ストラテジーの考案

研究課題名(英文) Designing Inferential Questions to Promote Students' Deep Reading Comprehension and Self-expression

研究代表者

田中 武夫 (TANAKA, Takeo)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：50324174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、読解指導において、生徒の読みを深め、読み取ったことを豊かに表現させるために、推論発問を中心とした読解発問を使った指導方略を考案し、その効果を調査することにある。高等学校の英語教師に授業協力を依頼し、推論発問、および評価発問を活用した英語リーディング指導の実践指導を1年間実施した。その指導を受けた生徒たちはどのように発問を捉えたかについて質問紙調査を行った。その結果、さらに工夫する余地はあるものの、推論発問や評価発問を活用した読解指導が、テキスト内容を深く理解させたり、テキスト内容に対する生徒の考えや意見を英語で表現させたりする点で大きく貢献する可能性があることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study explored whether the reading instruction using inferential and evaluative questions can promote students' deep comprehension and creative self-expression. Reading instruction in English using inferential and evaluative questions was conducted in a high school over a period of a year. We conducted a survey in the form of a questionnaire targeted at the students. As a result, it was found that there is a possibility that reading instruction using inferential and evaluative questions can effectively promote students' deep thinking and expression although there are still some room for improvement.

研究分野：社会科学

キーワード：リーディング指導 推論発問 評価発問

1. 研究開始当初の背景

これからの中学校および高等学校の英語のリーディング指導では、生徒が英文テキストの内容を理解することだけではなく、テキストの主題や筆者の意図を深く理解したり、読み取ったテキスト内容に対し生徒の考えや意見を述べたりすることが、これまで以上に求められてくる。しかしながら、中学校や高等学校におけるリーディング指導の現状には、テキストを和訳したり文構造を解説したりすることに時間がかかる、表面的なテキスト理解にとどまり生徒がメッセージを深く読み取ることまでには至らない、教科書には深い内容のテキストがあるにもかかわらず十分活用されていない、などの様々な課題がある。

このような英語教育の現状の中、いかに効果的にリーディング指導を行っていくかを考えていくことは重要な課題である。その課題を考えるための糸口として、これまで読解指導における教師発問の活用方略について一連の研究を通して論考してきた。発問とは、生徒に対する教師の問いであり、生徒が主体的に読解教材や読解活動に向き合えるよう、授業目標の達成に向けた計画的な教師の働きかけを指す。リーディング教材の内容に迫る教師の計画的な発問が、生徒の主体的な読解や豊かな表現を促す起点の1つになるものと期待できる。

読解発問には、大きく分けて、事実発問、推論発問、評価発問の3つのタイプがある。事実発問とは、テキスト上に直接書かれた情報を読み取らせる発問をさし、推論発問とは、テキスト上には直接示されていない内容をテキスト情報と読者の背景知識から推測させる発問をさす。そして、評価発問とは、テキスト情報に対する読み手である生徒の考えや態度を表明させる発問をさす。これらの発問の中でもとくに、推論発問、および、評価発問には、生徒から異なる解釈や考え方を引き出す特徴があることから、テキスト情報を読む生徒の動機を高める、生徒の読みを深く豊かにする、テキスト読解後の生徒の表現を豊かにする、生徒同士の協同学習を促すなどといった、読解指導において教師および生徒のいずれにとっても有益であるとみられる様々な可能性を秘めている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、リーディング指導において、生徒の読みを深め、読み取ったことを豊かに表現させるために、推論発問を中心としながら異なるタイプの発問をいかに効果的に連携させるべきかについて具体的な読解指導の方略を考案し、その読解指導を実際に行うことによって、その効果を調査し、読解指導における推論発問および評価発問の効果について検討することにある。

3. 研究の方法

本研究では、高等学校の英語教師に授業協力を依頼し、推論発問、および評価発問を活用した英語リーディング指導の実践指導を「コミュニケーション英語1」の中で1年間実施した。通常の授業の中で、読解指導における推論発問、および、評価発問を長期間にわたって活用する実践を行った結果、推論発問および評価発問に対し、その指導を受けた生徒たちはどのように認識するのかについて質問紙調査を行った。また同時に、本指導を行った教師にも、1年間の指導を振り返り発問を活用した指導に関する質問を自由記述の形で回答してもらった。

調査対象は、上記の指導を受けた37名(男子17名;女子20名)である。本調査で用いた質問紙は、氏名記入の形式で、11の質問項目から構成された。そのうち7つの質問は、5件法の選択式で、4つの質問は自由記述式であった。調査の実施後、回収した自由記述のデータをエクセルに入力し分析を行った。質問紙の自由記述は、各記述にコード化を行い分析した。コード化は、すべての自由記述に暫定的なサブコードを付け、その後サブコードを包括する上位概念にあたるコードを確定した。その後、共同研究者によるコード化の確認を行った。回答人数の少ないコードについても、発問のあり方を考えるための参考資料として分析対象に含めることにした。

これらの分析結果をもとに、読解指導における推論発問および評価発問の活用に対する生徒の認識についての考察を行った。

4. 研究成果

1年に渡る長期的な実際の指導実践の中で、読解指導の発問が、どのような効果をもたらした、また発問の活用にどのような課題が見られるのかについて、読解指導を実際に受けた生徒に質問紙調査を分析した。調査の結果は、次の通りである。

(1) 授業中の教師の英語使用に対する意識について

生徒への質問紙調査の結果から、1年間にわたり教師が英語を使った英語授業を継続的に実践する中で、生徒の英語に対する慣れが生じ、英語を中心とした授業スタイルに肯定的に捉えるようになる生徒が多くなったことがわかった。今回の指導にあたった教師に質問紙調査を行った結果から、推論発問や評価発問を活用することの利点として、「生徒が英語で発言する機会を多くもつことができ、英語を話そうとする姿勢が多くなってきたこと」や「授業の雰囲気は活発になり、生徒が生き生きしていること」、「授業のパターンができたため、英語を使った授業が行いやすくなった」ことが挙げられており、指導の中で発問をうまく活用することで、英語を使った英語授業を効率的に進めることができる可能性があることがうかがえる。

(2) 英語の読解力と表現力に対する意識について

生徒に対する質問紙調査において、1年間にわたり発問を活用した指導を通し、英語で読解する力と表現する力が伸びたと思うかどうかを生徒に尋ねた結果、英語での読解力と表現力に伸びがあったと感じている生徒が多いことが明らかとなった。これらの結果は、発問を通した指導の中で、テキスト理解、および、テキスト内容に基づく表現が、効果的に促されていると生徒自身が捉えていることからくるものと考えられる。ただし、今回の調査は質問紙に基づき、読解力と表現力に伸びがあったかを生徒に尋ねたものであり、読解力テストや表現力テストを実施した結果、読解力や表現力の向上が見られたわけではない。したがって、発問を活用した読解指導が、生徒の理解力や表現力を向上させるかどうかについて今後検証を行う必要がある。

(3) 推論発問および評価発問に対する全体的な意識について

今回の実践指導の中で用いられた推論発問および評価発問について、生徒に対する質問紙調査の結果、全体的に、推論発問および評価発問に対し肯定的に捉えている生徒が多いことがわかった。この結果は、発問を通した指導の中で、テキスト理解、および、テキスト内容に基づく表現が、効果的に促されていると生徒自身が捉えていることからくるのではないかと考えられる。肯定的に捉える具体的な理由としては、次に述べる通りである。

(4) 推論発問の良い点について

推論発問の良い点として「内容理解が向上する」ことが第1位の理由として挙げられた。英文テキストを読む際、推論発問が内容理解を促す働きをしていると生徒から肯定的に捉えられていることがわかる。

推論発問の良い点として第2位の理由として挙げられたのが、「思考力が向上する」である。推論発問は、テキストに書かれている事実情報をもとに、テキストには書かれていない事柄を推測させる問いであるため、考える力を向上させる働きがあると生徒に捉えられていることがわかる。

推論発問の良い点として第3位の理由として挙げられたのが、「表現が自由にできる」である。正解が1つである事実発問とは異なり、生徒から異なる考え方が出る自由度のある推論発問の特徴を、推論発問の良さとして生徒が感じていることがわかる。同じく第3位の理由として、「何度も繰り返し読む」ことが挙げられた。推論発問が、生徒の読みを効率的に促してくれる点に、そのよさを感じている生徒がいるようである。

その他にも、「表現力が向上する」、「英語の楽しさがわかる」、「内容の理解度を確認で

きる」というコードが挙げられ、推論発問では、本文に書かれていない内容を推測し答えるという特徴があることから、表現力の向上や楽しさにつながったものと考えられる。

(5) 評価発問の良い点について

評価発問の良い点として、「表現力が向上する」が第1位の理由として挙げられる。評価発問は、テキストに書かれていた内容に対する生徒の意見や考えを英語で自由に表現させるものであり、その点が生徒に肯定的に評価されていることがわかる。

評価発問の良い点の第2位の理由に、「思考力が向上する」が、第3位の理由として、「本文の理解が深まる」が挙げられた。このことから、テキスト内容に対する表現をさせる評価発問に生徒が取り組むことで、生徒の思考を促したり、本文内容の理解をさらに深めたりすることができると捉えている生徒がいることがわかる。その他の項目として、「自分で内容をまとめる」、「友達のことを知ることができる」や「授業に積極的に参加できる」にも注目できる。

(6) 推論発問の課題について

生徒に尋ねた質問紙の自由記述の結果から、推論発問の課題として、問いを易しくする、友達との意見交換を作る、英語表現について解説する、といった回答が多いことがわかった。今回の実践における推論発問および評価発問に課題がないわけではないことも明らかとなった。今回の実践を行った教師に発問を活用する際のポイントを尋ねたところ、「推論発問や評価発問に答えることができるよう事実発問を含めた発問の順序に注意する」や「発問に対して生徒が何をどのように答えればよいか明確にわかるようシンプルな問いを心掛ける」、「生徒からの様々な意見に触れることができるよう生徒のユニークな意見や表現をまとめて印刷し配布し共有する」ことを挙げられており、指導を実践した教師自身も、推論発問の難易度を下げたり、友達と考えを共有させたりといった、よりきめ細かな支援が必要であることを感じていることがわかった。

(7) 評価発問の課題について

評価発問の課題については、他の生徒と考えを共有したい、考えるためのサポートがほしい、英語での表現方法を教えてほしい、などとする回答が多かった。実践を行った教師に対する質問紙調査の結果からは、他の生徒と考えを共有することや英語表現を支援することに注意して指導を行ってきたにもかかわらず、生徒は英語表現の支援をさらに希望していることがわかった。推論発問、評価発問いずれの場合であっても、生徒の理解や表現を促すためのよりきめ細やかな発問の活用が求められることがわかる。

質問紙調査の以上の結果から、推論発問、および、評価発問は、それぞれ発問がもつ特徴通り、推論発問は本文テキストの内容理解を促したり深く思考させたりするという点で生徒から肯定的に捉えられ、一方の評価発問は本文テキストをもとに自分の考えを英語で表現させたりするのに役立つと生徒から肯定的に捉えられていることが概ね明らかになった。

以上の結果は、まだ一般化できるほど量的に十分なデータがあるとは言えないため、参考程度にとどめる必要がある。しかしながら、今回の質問紙調査の結果からは、推論発問および評価発問を実際に活用した授業を受けた生徒の生の声を聞くことができた。発問を活用した実際の英語リーディング指導において、発問の中でも推論発問や評価発問の活用に対し、生徒がどのような捉え方をしていたのか、そして、推論発問や評価発問を活用する上でどのような課題があるのかといったこれまで明らかにされてこなかった側面を垣間見ることができた。この調査から示唆されることとしては、推論発問や評価発問を活用した読解指導の工夫の余地はあるものの、テキスト内容を深く理解させたり、テキスト内容に対する生徒の考えや意見を英語で表現させたりすることができる可能性があるということである。つまり、学習指導要領で求める生徒の思考力・判断力・表現力を育成するために、推論発問や評価発問が有効に機能する可能性があるものと考えられる。また、リーディング教材を中心とした読解指導の中でもあっても、推論発問や評価発問を授業の中で効果的に活用することで、英語の表現力を育成することができる可能性も指摘できる。

本研究では、読解指導における発問のあり方を探るために、質問紙調査をもとに、長期にわたる読解指導実践における発問の効果および課題について考察したが、実際の読解テストおよび表現テストにおいて、発問を用いた指導効果が見られるのか量的にも検証する必要がある。また、個々の授業の中で実際にどのように発問が活用され、どのように生徒の理解および表現が促されていくのか、などについて今後さらに引き続き検討していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

田中武夫, 「推論発問でメッセージを読み取らせる」『Teaching English Now』22号, 査読なし, 2012, 6-7頁

田中武夫, 「発問を活用してリーディング指導を英語で行う」『英語教育』9月号, 査読なし, 2013, 16-18頁

田中武夫, 辻智生, 「推論発問および評価発問を活用した英語リーディング指導の実践 高等学校における1年間の実践事例を通して」『教育実践学』20, 査読なし, 2015, 159-171頁

〔図書〕(計3件)

青木昭六, 江利川春雄, 田中武夫ほか(共著), 保育出版社, 『英語科教育のフロンティア』2012, 34-35, 61-62, 151-153頁

大下邦幸, 紺渡弘幸, 田中武夫ほか(共著), 東京書籍, 『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』2014, 108-115頁

山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会, 泉恵美子, 今井裕之, 田中武夫ほか(共著), 開隆堂, 『第2言語習得研究と英語教育の実践研究』2014, 205-216頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 武夫 (TANKA, Takeo)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号: 50324174

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし